出光美術館研究紀要第二十三号抜刷
二〇一八年一月三十一日発行

書の鑑賞教育プログラムⅣ

――高等学校芸術科（書道）と企画・展示の関わり方

笠嶋忠幸

書の鑑賞教育プログラムⅣ——高等学校芸術科（書道）と企画・展示の関わり方

笠嶋忠幸

はじめに——博物館学における展示論と教育論の間
一、美術館における教育普及の昨今——実践的学習と鑑賞体験
二、高等学校芸術科（書道）における鑑賞教育の実践報告
三、教科書内容を補完する企画・展示の工夫と観点
——企画展「書の流儀Ⅱ」の舞台裏
結びにかえて

はじめに——博物館学における展示論と教育論の間

二〇〇八年の博物館法一部改正を承け、二〇一二年の前後ごろより順次、学芸員資格取得課程を開設している諸大学では、博物館学の講座として学ぶべき内容を細分化しながら改編している。国の指導指針に準じつつ、現在では「教育論」「展示論」「資料論」「メディア論」「経営論」等の名称で新たな講座が追加開講されるようになったのである。従来、博物館学の講義では、いわゆる〝四つの柱〟とする「企画・展示」「保存・管理」「調査・研究」「教育・普及」を基本としてきたが、その一つひとつを、より深く学ぶことや、時代のニーズに合わせ現状に適応した指導内容となるよう調整されたものである。

当館は東京・丸の内に位置する、まさに首都圏の私立美術館であり、周囲におけるここ五年間の活動、事情などを参照してみると、美術館・博物館を取り巻く運営状況は、一気に様相が変わってきた、と実感するところがある。日本における美術館事情は複雑で曖昧な点も多いためか、多様さに長けながらも充実度に関しては疑わしく、近年では公立館で大規模な文化事業としての企画展開催が使命であるかのごとく語られることが少なくない。

専門家である学芸員が「企画・展示」を行うには、日々の「調査・研究」の充実が基盤になくてはならず、「調査・研究」を踏まえなければ「保存・管理」する上での専門的なデータは揃わない。そしてこれらが充足した後、各々を包括する観点から社会教育施設としての「教育・普及」の意義や機能が発信されていくのであり、いわば一過性の広報的普及活動を以て、博物館法に則った責任ある活動を遂行しているとは言えないだろう。

本稿ではこのような「企画・展示」と「教育・普及」との間に潜む課題についてふれながら、博学連携ならびに美術館教育（鑑賞教育）の観

点から、特に高等学校芸術科（書道）における現状を振り返って考察する。学校現場で扱っている教科書や、指導者である教科担当者（または書道担当教員）たちの活動といかに「企画・展示」を関連づけ、効果的な鑑賞体験を発信してゆくかについて改めて考えてみたい。

一、美術館における教育普及の昨今
――実践的学習と鑑賞体験

従来、美術館における教育普及活動は、体験型学習と親しい関係を保ちつつ発展してきたことは言うまでもないが、その実態は学芸員が直接、初歩的な実技指導に携わる場合のほか、より本格的な作家の支援を受けた実技指導が行われてきた。これは公立館においては不可欠な活動であり、各地域における文化芸術愛好の発信を責務とした取り組みとして行われてきた。年齢を問わず、有意義な学習体験が手軽に行える場として、まずは「敷居の高さ」を低くし、積極的かつ能動的な参画を目標に設定した社会教育活動と見なせる。それでもまずは興味をもってやってみる、という初歩的な学習体験の延長上に愛好者が育つという前提に立つ場合がほとんどで、年齢に応じた様々な工夫が凝らされながら振興されてきた。

このような活動は、近年では、美術館・博物館ばかりが主導ではない。平成二十五年度から三年間、静岡大学が取り組んだ文化庁助成事業「大学を活用した文化芸術推進」の「地方総合大学からの文化力発信プロジェクト」は、アートマネジメント力の育成を主眼とした事業で、県内を主とした地域作家や専門家を協力者として、様々な分野のワークショップの開発を試みている。その成果は平成二十八年度に「アートマネジメント人材育成のためのワークショップ」事業として受け継がれ、「地域リソースの発掘・連環・創造」をテーマに実践的な活動を重ねている［註1］。ここでいう「アートマネジメント」に携わる人とは、民間の指導者、伝承者の意に近く、実技・実演力の指導を将来に向けて継承し、それを専門的に行う者と理解できる。つまり多様なアートの世界の魅力をこれから後に発信していける「人材育成」の観点を主とした取り組みであり、その中の実践Ⅰ・アート系に「書」が採用されていることは貴重な事例である。このほか言語系、施設系、実務系、福祉系、まちづくり系などに分類された内容は実に幅広く拾われており、まさに「アートマネジメント」の語の様相を網羅しようと試みたものといえる。

このような活動は他にも類例があり、大学という研究機関が、将来の文化芸術を愛好する人材の存在について危惧し、実践的体験を促す取り組みが多くなったことを示唆している。これまで美術館教育（美術館の「教育・普及」活動）の中で開放的な観点から行われてきた内容とこれらは、立場を違える訳ではないが、視点や手順は異なっている。ここでは「将来の指導者」を育成する立場に重きを置いている点が重要であろう。

たとえば国立新美術館が推進する教育普及活動では「参加し交流し創造する美術館」をテーマに掲げ、幅広い活動の一部にアーティスト・ワークショップを継続的に開催している。ただし、主体が美術館である以上、来館者の作品鑑賞の充実を目的としている点で姿勢が異なるが、未就学児親子を対象とした「はじめてのアート」シリーズなどもあって、海外のアートセンターに似た活動形式となっている［註2］。

こうした大学が主体となった活動とは別の発展的形態として、東京都

美術館のアート・コミュニケーション事業が挙げられる。東京都美術館と隣接する東京藝術大学との理想的な連携による教育普及活動は、「とびらプロジェクト」の愛称をもつが、同館が企画開催する教育普及のための「キュッパのびじゅつかん」展と常に呼応する活動を主眼としている。担当の稲庭彩和子氏は、東日本大震災の後の社会事情を引き合いに「コミュニティの質が希薄化する中で、人との関わりの回路を作り続ける必要性」を感じ、そのためには「参加性」「多様性」「共同構築的な知」が大事であるとして、この三つを基軸とした企画展を活動に据えたとしている。教育普及型の企画といえば、従来は良くも悪しくも「児童生徒や初心者への配慮」が前面に出たものが多い中、稲庭氏は捉えどころのない美意識を、鑑賞者各々が自主的に「愛でる」体験を通して学ぶことが重要と説く。「見つめ、集め、調べ、並べること」を専門的な見方もあえて交えながら整えている［註3］。

二、高等学校芸術科（書道）における鑑賞教育の実践報告

二〇〇五年度・文化庁助成「芸術拠点形成事業」にて、高等学校芸術科（書道）における鑑賞教育の実践研究会を行い、報告書を全国の高等学校・書道担当教員へ配布したが、実態としては未だここで議論された内容が広まったとは言い難い。各県下にてミドル世代の教諭たちを中心に、鑑賞教育推進の動きや個別事例の報告などは見受けられるようになってはきたが、事例はまだ極めて少ないといえる［註4］。こうした活動の発展的試みとして、二〇一七年に出された萱のり子氏による東京学芸大学の報告書がある［註5］。この報告書は、萱氏を中心とし、その教え子の中より教育現場に立った八名、小・中・高の教諭たちが参画した本事業の成果を収めたものである。現行の学習指導要領に準拠し、ワークシートを積極的に開発、これらを用いて各現場では、能動的な対話型学習の取り組みが試験的になされている。鑑賞から実技へ、実技から鑑賞へとその観点こそ両者の視線は逆であるが、鑑賞の対象として扱う書道の古典については共有認識できる範疇にある。ただし教育学の求める結果は、各教育現場における指導の充実に狙いがあり、これが美術館における純粋な実作品の鑑賞を優先する意識とは異なっている。書道の授業では必須となる「臨書」活動の特質を考慮すれば、いわゆるお手本を何度もじっくり観察する行為が前提として存在している点は、美術でいう写実的なデッサン等にあたるものと見なせ、「見る」と「書く」との動作を兼備した行為であるとも考え得るだろう。

以下は、二〇一七年度文化庁助成「文化芸術による子供の育成事業／芸術家の派遣事業」（十一月十四、十七、二十一日実施、於：千葉県立国府台高等学校、担当教諭・後藤浩氏）にて行った鑑賞授業の内容報告である。ここでは、現場の担当教諭と美術館の学芸員とが、双方の立ち位置を尊重しながらも学習の場を完成させるよう心掛けた。当該三日間を出光美術館の企画展「書の流儀Ⅱ」の会期中に行い、週末等を利用して実作品を鑑賞できるように工夫した。なお当該企画では、教科書対応型の展示内容を目指して、教科書に準拠した作品を要所に据えた上、日本の書表現の流れが概観できると共に、教科書では学べない視点の補完にも考慮した。

◆鑑賞授業の時程と概要、留意点

［第一時限目］

◎ＰＰＴでスライドを黒板方向へ投影し、授業開始。

◎授業のテーマには、「鑑賞の手順」として「見る」「くらべる」「考える」を提示。

書作品の鑑賞形態に関しては、二律背反の観点が避けられない。それは「見る」行為と「読む」行為の拮抗する状態である。造形を眺めているだけだと理解していても、その概観が文字の形の雰囲気をもっているだけで、人は「読もう」と意識してしまう。この点を分別して理解できるように、少なくとも二つ以上を比較しながら造形的な特徴が理解できるように「比べて見ること」「じっくり部分を観察しながら比較すること」を大事な手順とした。

◎準備練習ワーク① 観察する〈似ている？　似ていない？〉

【例題】1　ＰＰＴ　伝雪舟・一行書「南無布袋和尚」（徳川美術館蔵）

→不思議な筆線の表情を観察～鳥のシルエットが隠れていることに気づけるか

～絵文字的表現を見つける＝絵画表現と書との関連を理解する

【例題】2　ＰＰＴ松井如流（現代書）の倣書作品と、モデルとなった拓本「石門頌」

～似ている箇所を指摘できるか（任意の生徒を指名して、発言を促す）

○ワークシート①十時梅厓賛「蘭亭曲水図」（部分）　出光美術館蔵

※二人席のため、隣との相談ありとする。

【実践】ＰＰＴで展示作品の部分アップ、画像を印刷

・教科書（教育図書『書Ⅰ』）41～42ページを見ながら、画像と比較して、字形や筆画の特徴、表現が〈A似ている字〉〈B似ていない字〉を判別

・各々に該当する文字を□で囲んで、A、Bのいずれかで判定、三ヵ所ずつ抽出

・字を選んだら、どの部分のどのような表現についてそう思うのか、を適宜○で対象部分を囲み、それらについてシートの余白に説明をひと言、書いてみる

【確認】画像を見ながら検証～解説

〈A〉似ている……どうして似ているのか？　を考える

例→学んだ成果が発揮されている

→なんとなく印象が似ている～見て書いた？　偶然？

〈B〉似ていない……どうして似ていないのか？　を考える

例　→　意図的に工夫した？

→　たまたま書いたらくずれた？　～別の手本がある？

※補足　〈B〉の中でも、全く書風、書体が変わってしまっているものは〈C〉とする

→この部分は、本人の工夫なのか？　個性や書きぐせ？

◎ポイントは、生徒とのキャッチボール。ワークシートを楽しむために、対話により参加する意識が高まるように。

◎まとめ①……自分の視点で「見つける」楽しさ＝観察すること、その方法の理解

〈休憩〉＝休憩に入る前に、次限の着席スタート時間について確認する。

［第二時限目］

☆ワークシート①の確認　「鑑賞」のコツを確認＝「気づき」の大切さを解説し、意識共有

一人の気づき～話し合い

→※四人グループへ途中変更

○ワークシート②張瑞図「行草書西園雅集記軸」（部分）　東京国立博物館蔵

【実践】ＰＰＴ画像で解説

・教科書56～57ページを見ながら、ワークの進め方を説明

→造形の似ているもの同士、特徴を抽出して分類

〈Ａ〉蘇軾　〈Ｂ〉黄庭堅　〈Ｃ〉米芾

・同様に、該当する文字を□で囲み、Ａ、Ｂ、Ｃのいずれかに分類

……二ヵ所ずつ抽出

→◎机間巡視と相談役を務める～適宜アドバイスも

・選んだ字の、どの部分に対して、そう思うのか、○で囲んで示し、余白に説明を記す

【確認】四人グループで検証作業

～班の代表、各班一つずつ、前に出て具体的な説明をする

※目安　八班×二分前後＝十五分程度

【まとめ】②「鑑賞」のコツをつかむ……部分に注目し、観察する

・比べると、それぞれの特徴がわかるようになってくる

☆事例ＰＰＴ　教科書56～57ページの図版＝中国・宋時代の書法の継承性を解説

・学びによって継承される造形の特徴と、変容する個性との関係

・研究者たちは、どのように鑑賞しているか？　専門的な視点の説明

→画像を用いて観察方法の具体的な説明～部分のアップ

＝視野の取り方、視点・どこをどのような感覚で見ているか？

○終了（あいさつ）授業内容のまとめ、アンケートほか提出物の確認

三、教科書内容を補完する企画・展示の工夫と観点

――企画展「書の流儀Ⅱ」の舞台裏

現在、高等学校では「アクティブ・ラーニング」ならびに「インタラクティブ・スタディ」をキーワードとした学習者の自主性を重んじた教授法が研究、推進されている。そうした中で「鑑賞」という観点は、これまで以上に重要視され、再認識されるようになってきた。

本稿における前述の報告内容は、これまで当館が高等学校の芸術科（書道）の教育現場と継続的に行ってきた推進活動の延長上にあるものであり、現状に対し新たな提言をするものではない［註6］。むしろ、現在

に至るまでの動向を見守りつつ、様々な可能性を模索しながら提案してきた実践結果を踏まえた際、近年は特に芸術科（書道）の教育現場における教科書使用のあり方に注視すると共に、現実的かつ効果的な鑑賞教育の模索に努めてきた。その結果、本稿で取り上げている当館の企画展「書の流儀Ⅱ」では、教科書対応型の展示を目指すこととした次第である。

聞き取りを主として行った現状把握より得られた諸現場からの回答は、実質的に開講中のほとんどが「書道Ⅰ」の実践のみに留まり、「書道Ⅱ」「書道Ⅲ」については不十分ないしは未開講であるという内容であった。その状況は文科省においても把握できているため現行の指導要領では「書道Ⅰ」の内容の充実が図られ、これに準じて各教科書会社が制作する「書道Ⅰ」の内容も、従来「書道Ⅱ」「書道Ⅲ」で扱っていた内容の一部を「書道Ⅰ」へと組み込む形式に至っている。つまり本来なら三ヵ年を費やして学ぶべき内容（主に実技的内容）が、現在の現場では詰め込み型のものと化しているため、必須とされる内容のすべてを遂行するだけでも、年間の授業時間数では全く足りない状況であることが、外部の眼からも容易に見て取れる。

こうした現場の実情が把握、理解できた時点で、通常の判断なら後発的な鑑賞教育の実践は、現場の重荷でしかないという考えは、ある意味で頷ける。しかし、「鑑賞力」を培うことが高等学校教育での使命とされる以上、現在の授業内にどのように組み込むか、またどのような手段や方法で取り組むかが、各教員の大きな課題となっている。

この課題に対する新たな提案が、教科書対応型の企画展である。これまでも同様の観点は少しずつではあるが、実験的に展覧会企画の一部分に適用するなどの工夫は凝らしてきたが、今回の企画展「書の流儀Ⅱ」では、教科書に掲載される作品や指導上の観点などを理解した上で、これに準拠した作品選定ならびに作品解説を整えた。その主たる観点は、作品同士を「比べる」ことである。

作品鑑賞も実践学習（実技的錬成・作品制作）も、そもそも基準（典型、手本）とすべき作品があって、そこから学習は始まる。その際の基準とは、教科書の場合、いわゆる「超名品」が掲載されているため、教科書どおりの企画展の実現は、およそ不可能であると言ってよい。今後はＩＣＴ機器を活用して、高精細画像を用いたバーチャル授業は実現できるようになろうが、それは実物に触れて鑑賞する視覚効果、体験効果とは全く異なる次元のものであろう。このような観点に立てば、美術館の役割とは、可能な限り所蔵品を活用して、安定的な鑑賞空間を提供できるかにあると言える。当館のコレクションの場合、日本書道史がある程度、網羅できる内容を強みとする一方、中国書道史に対する理解を促す作品は、ほとんど所蔵していない。そのため借用作品を一部に交えて企画構成することが多くなっている。当該展においても、所蔵品と関連のある作品十八件を他館ほかよりご協力いただき、借用展示した。

以下、展示工夫の内容について、その一端を企画側の観点と共に掲げておく［註7］。

第一章「伝える、伝わる――伝統美の継承と多彩な個性」では、冒頭に「蘭亭図巻」より「蘭亭序」の「唐人搨本」の部分と、江戸時代の例として「蘭亭曲水図」に書かれた十時梅厓による蘭亭序の賛文とを比較できるよう展示した。各社教科書「書道Ⅰ」では、およそ中国・故宮博物院所蔵の「神龍半印本」の図版がカラーで掲載されていること、また

図1　ワークシート①の実践例

どの現場でも「蘭亭序」を書くことが、ほぼ必須と認識され、実践されていることから、親しみやすい類型作品として、導入に据えた。その上で、鑑賞と表現における自由度について、歴史的観点からも理解を促し、現場における実技指導への補完を試みた。

また、江戸時代後期の能書として位置づけられた文人たちが手がけた漢詩漢文の作品では、彼らの学習背景として導かれる古典的表現の表情についても、指導者側が鑑賞実践を促しやすく、また解説も施しやすいように整えた。だが、いわゆる「名品」とは言い難い当館の所蔵品に対し、初めて出会う鑑賞者にとっては、指導側と学習者側といった区別はない。これは高等学校に特化されるものではなく、一般にもそうである点が大きな課題である。この場合、たくさんのパネル（比較画像や解説）を用いることは、わかりやすさという面では効果的であるが、日本における作品鑑賞の特徴として、解説文が多いと作品をじっくり観察する時間が損なわれる傾向にあることも重要な課題の一つである。さらに数多くの作品が展示されている場合は、鑑賞者自身に選別して見る習慣がないと、鑑賞行為そのものがストレスになることもあって、解説はむしろ最低限度に留めることとした。その代わりに「鑑賞のヒント」と題したパネルを掲げて、ポイント解説とし、理解が促されるよう工夫した。

たとえば、浦上玉堂「録詩書屏風」と張瑞図「行草書西園雅集図記軸」（東京国立博物館蔵）を比較展示したのは、いずれも中国・宋時代の三大家である蘇軾、黄庭堅、米芾らの書風を学んだ跡が窺える作品であることを第一のポイントとした。教科書でも宋の三大家の作品を紹介し、書風の特徴や相違点について解説を施している。しかし現場では、これら掲載頁を対象として学ぶ時間はほとんど設けられていないようであり、

図 2　ワークシート②の実践例（1）

図 3　ワークシート②の実践例（2）

あえてその頁との兼ね合いを試みた。直截的な対応を目指すならば、当然、教科書に図版が掲載さえている作品を借用展示すれば良いのだが、先にも示したとおり、それではそもそも所蔵品を広く展示公開する場であるはずの美術館・博物館の活動自体に支障があると考えた。近年、美術館・博物館の現場でも名品主義、イベント型とも呼ばれる企画主義の展示は多いが、当館では所蔵品主体の企画を保守的に継続してきた。その所蔵品の特徴や歴史的意義づけを行いながら、教育現場との連携を整えてゆくことが、学芸員が目指すべき教育普及型、そして博学連携を継続的に見据えた、責任ある企画のあり方であると考えている。

こうした観点を第二章の「王朝の壮麗美――かな書の旋律」でも展開させた。最初は「継色紙」と「寸松庵色紙」を比較。和歌一首分を書くために用いられた紙面の大きさと紙の質感を対照させ、その上に書きぶりや書式も異なることを比べて考えられるようにした。また当館は「継色紙」を二点所蔵するため、一点は覗きケースに展示して、可能な限り接近して線や紙の質感を見て取れるようにした。平安の仮名の作品は、作品自体が小さい上、ひと文字の大きさも極めて小さく、繊細な表情の観察について配慮が必要である。壁ケースの奥行はおよそ一メートルだが、仮名古筆の作品には、すべて特設のボードを設置して、そこに懸けることで距離感を縮めることができる。視覚効果を高め、鑑賞性を誘うための工夫である。

その他、「高野切第一種」および「高野切第二種」「香紙切」など仮名の授業現場においてもよく取り上げられる作品を展示し、仮名表現の典型と個性美についての理解が進むように配慮した。その延長上に二種類の「石山切」の個性を対として、表情の比較を通して、さらに仮名表現の豊かさを感じてもらえるようにした。従来における「石山切」の展示方法では、麗しい料紙装飾と仮名表現とが共生している効果を主要な観点に据えることが多かった。そこを、料紙の美麗さは、前提とした上で、より筆線や字形の表情に対する観察を深めてもらえるような工夫をした。そしてその観察成果が、書作品の鑑賞において不可欠である「ハレ」と「ケ」の表情の違いについて、自然と気付くような工夫も加えた。更にこの観点を深める事例として、この章の末尾に伏見天皇「筑後切」（ハレ＝公用書体）と「広沢切」（ケ＝日常的な筆記書体）を比較展示し、「鑑賞のヒント」として解説パネルを添えた。

「書」という一語の概念や枠組みは現代に至ってわかりにくさを極めた。筆で書かれた文字がすべてであった時代には、あらゆる筆跡を一括するものではなく、様式的区別があり、様々な評価基準があって、社会性の違いと共にそれらの価値観にも、自ずと分別や領域が存在していた。しかし近代以降の流れで、識字率や筆記用具の移行と進化などが手伝って「書」と呼ぶべき感覚も実に曖昧になってしまったことで、迷子と化した。とはいえ、このあたりの交通整理ができれば、自在に変貌した「書」の世界は豊かで、確かに歴史上では日常性の強い卑近な芸術であったし、その美のあり方も多様で、判断は個性美に導かれるものであるだろう。もとより鑑賞者側にも好みがあって、それは視点、観点に大きな影響を与えながら、鑑賞空間は成立している。すなわち美術鑑賞の特徴でもあろうが、経験と好みの領域は重なっている訳で、にわかに切り離せない。ただその観点を広げてもらうためには、筆文字とこのように遠ざかってしまった現在では、視覚的に比較することで、視点の位置取りに変化が起こり、かつその連続性を促すことによって、本質を自主的

に見出したり、直感的に感受することができるようになったりするのではないだろうか。「見る」は出会い、「比べる」は多様性を理解する手立て、そしてこれらの体験を通して自発的になぜ、どうしての問いかけが自身へ向けられるようになれば、制作された背景を知りたくなるだろうし、作品の状態、状況、特質についても詳しく知りたくなり「考える」習慣が身についてゆくだろう。つまり総合的な鑑賞を、専門的な見地から与えるものと考えず、あくまで自発的に始められるような心の準備のお手伝いに学芸員は努め、鑑賞者の眼や気持ちに寄り添うことが大事だと考える。

第三章「正統なる逸格――没後４００年・後陽成天皇の周辺」では、後陽成天皇という桃山時代の象徴的な人物像をめぐり、意識的な書作への目覚めとして、一行書、色紙、短冊、巻物、そして消息といった各種形態を比較展示した。また書作が貴族たちだけの世界ではなくなった当時の一例として、町衆・本阿弥光悦とその周辺の多彩な作品も展示した。約九メートルに及ぶ巻子装の作品「月に萩・蔦下絵古今集和歌巻」は巻頭から巻末まですべて開いて展示することで、巻物という形態に文字を展開させる美しさや空間構成の巧みさについて学べるようにした。

第四章「画賛――漂泊者たちの遊芸」では、第一章にて「伝える、伝わる」と題した観点をまとめ、連関性をもたせた。世に天才と称される才能は、伝わらない突然変異のようなものであるが、それこそ象徴美であって理想とされるものだろう。書の世界も同様であり、歴史上の著名な人物であればあるだけに、その代表作や事跡、名前のブランド力が鑑賞の補助となっている場合が多い。すると、書を鑑賞するのではなく、書表現を鑑賞する場合には、作品と制作背景とが、一度分別されて理解される場や時間が必要となるが、絵画や工芸の鑑賞と異なり、人物像への共感が先行してしまい、造形性に対する理解がほとんどなされないことも多い。今回も列品解説（ギャラリー・トーク）を介して、このような命題を公に話すと、来館者の大方に反応が得られたが、この不明瞭な点が、おそらく書作品を鑑賞する上での大きな障害となっているように感じられた。

結びにかえて

芭蕉自筆「発句短冊」は「ふる池や」の名句。しかしキャプションから見てしまうと、そこには筆者名が明示され、さらに釈文も解説も、読みやすい活字で示されている。鑑賞者が作品そのものと向き合う時間は、ごくわずかである。筆の跡、その線の表情を観察し、そこに何かを感じ取る暇はないほどで、美術作品の観察というには程遠い。こうした手順が一般化している現在の状況を認識し、ふと高等学校における芸術科（書道）の鑑賞体験はどうであろうか、と疑念を抱いたのが、二〇〇〇年ごろ。鑑賞教育や博学連携について考えるようになる契機であった。

その後は、いわゆる「出前授業」という活動の場を通じて、都区内、首都圏、各県の高等学校現場で活躍されている先生方と協議する機会を得たり、鑑賞プログラムやワークシートを作成したり、ワークショップを開催したりと実践を重ねてきた。近年になり、ようやく学習指導要領でも鑑賞の重要性が説かれるようになり、また教科書もその指針に対応すべく、鑑賞力育成への工夫が多様化してきている。

しかし鑑賞とは、作品がまず展示されて鑑賞の実体験が可能となる。

いつでも可能である状態が前提条件として整わない限り、教育現場と美術館との連携はあり得ない。だからといって、教科書に図版掲載される作品を、日本国内の至るところで常時観ることができるようにするのは不可能である。いわゆる地域型博物館や美術館において、定期的な所蔵品の公開がなされる機会を活用し、学校現場の先生方は見学会を催したり、学芸員ほか専門家を学校へ招聘して特別授業を開いたりと、様々な工夫を凝らしている。さらに県の教育庁主催による、鑑賞教育の研修会なども企画開催されており、徐々にではあるが、鑑賞教育への取り組みは進んでいるといえる。こうした教育の現場と連携し、豊かな鑑賞体験の推進に取り組んでゆくことが、今後一層、社会教育施設の責務として美術館・博物館には求められてゆくだろう。

註1―静岡大学アートマネジメント力育成事業事務局・報告書『平成28年度文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」アートマネジメント人材育成のためのワークショップ100～地域リソースの発掘・連環・創造のために～』二〇一七年、国立大学法人　静岡大学）。

註2―『やってみよう、アート　国立新美術館ワークショップ記録集　二〇〇七年三月～二〇一一年二月』二〇一一年／『やってみよう、アート　国立新美術館ワークショップ記録集　二〇一一年三月～二〇一七年一月』／二〇一七年、国立新美術館教育普及室）。

註3―『アート・コミュニケーション事業ドキュメント「キュッパのびじゅつかん」展から』二〇一七年、東京都美術館）。なおすでに一九九三年より、大原美術館では未就学児対象プログラムを行っている。本報告ほか、美術館教育に取り組んでいる主要館の簡潔な報告は、『教育美術』第797号「特集・美術館の教育プログラム」参照（二〇〇八年、教育美術振興会）。幼児の美術鑑賞について対話型鑑賞が効果的であるとの実践報告は、近現代美術を専門とする美術館での事例が多い。近年の例では、新潟県立近代美術館の報告（宮下東子氏「幼児の鑑賞と体験に関する一考察」）があり、学芸員やナビゲーター等、指導にあたる者のスキル、理解度、取り組み姿勢や教養、見識、感性までが都度の結果に表れるものと理解できる。『新潟県立近代美術館研究紀要』第15号、二〇一六年。

註4―後藤浩教諭による、これまでの実践結果をまとめたものに、後藤浩「第40回全日本高等学校書道教育研究会山形大会、分科会・研究協議B研究テーマ・見ること（鑑賞）「見ることの喜びを、甘受する鑑賞指導」、「みることからはじめよう！　Part2――博学連携による鑑賞授業」（千葉県立国府台高等学校『国府台論集』第三十二号、二〇一六年）がある。

註5―報告書『「臨書」を基点とした実践的授業研究――文化理解と個の実現』（二〇一七年一月、東京学芸大学）／報告書『「臨書」を基点とした実践的授業研究Ⅱ――批評力を高めるための2つの検討』（二〇一七年十二月、東京学芸大学）。

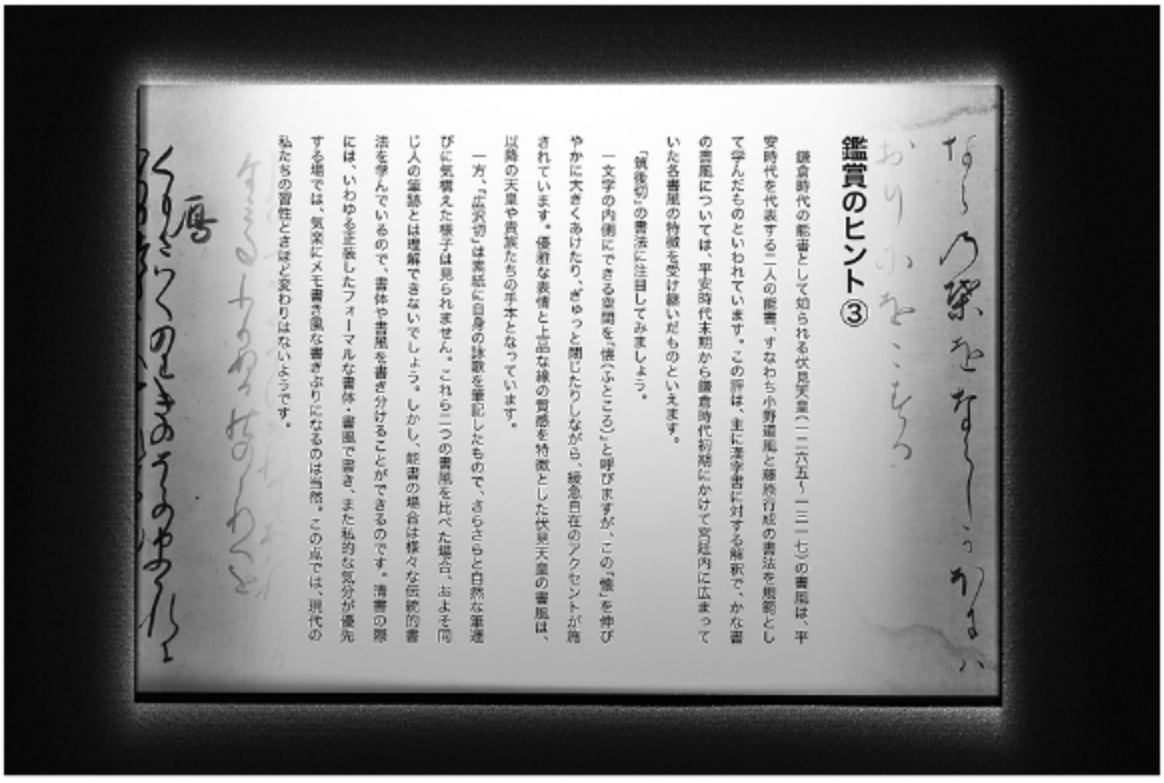
註6―美術館における博学連携による鑑賞体験の推進については、拙稿「書の鑑賞プログラムⅢ――高等学校・芸術科（書道）における実践と課題」（『出光美術館研究紀要』第十九号、二〇一四年）ほかを参照。

註7―企画展図録『書の流儀Ⅱ――美の継承と創意』（二〇一七年、出光美術館）参照。

図 4　展示風景（1）

図 5　展示風景（2）

図６　展示風景（3）



鑑賞のヒント③

鎌倉時代の能書として知られる伏見天皇（一二六五～一三一七）の書風は、平安時代を代表する二人の能書、すなわち小野道風と藤原行成の書法を規範として学んだものといわれています。この所は、主に漢字書に対する解析で、かな書の書風については、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて宮廷内に広まっていた各書風の特徴を受け継いだものといえます。

「巻後切」の書法に注目してみましょう。

一文字の内側にできる空間を「懐（ふところ）」と呼びますが、この「懐」を伸びやかに大きくあけたり、ぎゅっと閉じたりしながら、緩急自在のアクセントが施されています。優雅な表情と上品な線の質感を特徴とした伏見天皇の書風は、以降の天皇や貴族たちの手本となっています。

一方、「広沢切」は紙に自身の詠歌を筆記したもので、さらさらと自然な筆遣びに気構えた様子は見られません。これら二つの書風を比べた場合、およそ同じ人の筆跡とは理解できないでしょう。しかし、能書の場合は様々な伝統的書法を学んでいるので、書体や書風を書き分けることができるのです。清書の際には、いわゆる正装したフォーマルな書体・書風で書き、また私的な気分が優先する場では、気楽にメモ書き風な書きぶりになるのは当然。この点では、現代の私たちの習性とさほど変わりはないようです。

図７　展示風景（4）——会場に掲示したパネル

2017.11.14／17改訂／21最終

芸術科（書道）　鑑賞授業　文化庁・文化芸術による子供の育成事業
於：千葉県立国府台高等学校
実施：2017年11月14，17，21日

sec.	ワーク	事　　項
0~5	授業内容説明	講師紹介～鑑賞の授業について（後藤）
		準備物の確認（教科書、筆記具）、机上の状況
5―	PPT開始	本日のテーマ、「鑑賞の手順」解説　※　比べて見るとわかること
8―	ワーク　練習①	● 観察する<似ている？似ていない？>
		～【練習】　雪舟「南無布袋和尚」（筆線の表情～書表現と絵画性）
15―	練習②	～【練習】　松井如流作品と拓本「石門頌」（学書から表現へ）
30―	WS①　蘭亭序	WS配布 ～ 名前記入 ～ ワークの説明
		◎教科書41～42ページを見ながら比較して<似ている字><似てない字>を判別
		該当する文字を□で囲んで、A、Bのいずれかに・・・3カ所ずつ抽出
		選んだ字の、どの部分がそう思うのか、○で囲んで示し、余白に説明
40―	確認	PPT画像で検証、解説
		<A>似ている　→　学んだ成果が発揮されている
		→　なんとなく印象が似ている
		<B>似てない　→　意図的に工夫した？
		→　たまたま書いたらそうなった？
		※　<B>の中でも、全く変わってしまっているもの　→<C>
48―	まとめ①	「見つける」楽しさ・・・観察すること、その方法
	<休憩>	※休憩に入る前に、次回の着席スタート時間について、ひとこと。
0―	WS①の確認	「鑑賞」は楽しい：一人の気づき～話し合い　→　※4人グループへ変更
2―	WS②　張瑞図	WS準備　～（名前記入）～　ワーク説明
		ＰＰＴ画像で解説
		◎教科書56～57ページを見ながら、ＷＳのルールを説明
		→　似ている特徴を抽出して分類
		<A>蘇軾　<B>黄庭堅　<C>米芾
5―	ワーク開始	該当する文字を□で囲んで、A、B、Cのいずれか・・・2カ所ずつ抽出
		選んだ字の、どの部分に対して、そう思うのか、○で囲んで示し、余白に説明
20―	確認	検証　～　班の代表者、各班1つずつ説明　※8班x2分＝16分
36―	まとめ②	「鑑賞」は楽しい＝コツをつかむ・・・部分に注目し、観察する
	～比べる（応用）	【事例】教科書56～57ページの図版 ＝　宋時代の書法の継承性を解説
		◎学びによって継承される特徴と個性との関係
40―	鑑賞の視点（専門的）	PPT画像を用いて観察方法の説明～部分のアップ＝視野、視点
		【事例】出光美術館『書の流儀Ⅱ』の展示作品から
		→　見てわかること＝見えた状態を、そのまま言葉で説明する
		※作品に沿って観察し、見たままを客観的に考察
		～　考察した事象から、復元することも可能・・・「観察力」の大切さ
43―	学芸員の仕事	美術館や学芸員に興味をもってもらうための解説　◎ＰＰＴ画像で
		→　美術館という職業 ～ 多彩な職務内容
45―	終了あいさつ	授業内容のまとめ、アンケートほか提出物の確認

図8　スケジューラー

ワークシート①　　組　　番　　氏名

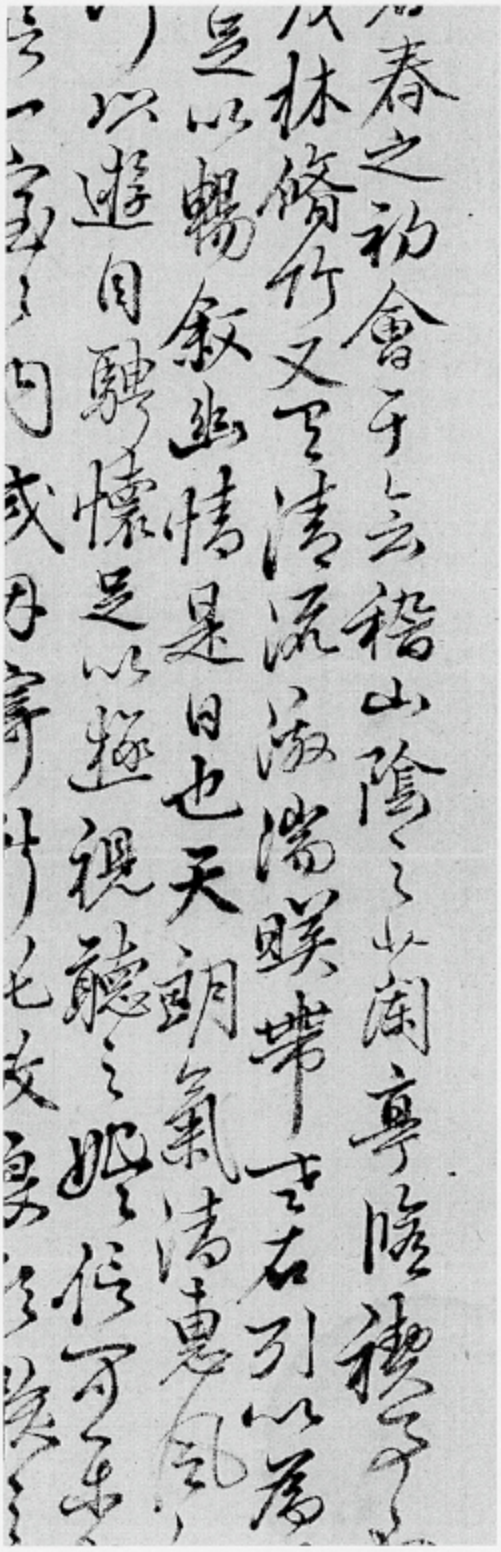


図9　ワークシート①

図 10　ワークシート②

Image: TNM Image Archives

Education Program for Appreciation of Calligraphy IV —How to Relate Art (Calligraphy) Departments of High Schools and Museum Planning and Exhibitions

KASASHIMA, Tadayuki

In Japan, one who wishes to take a curator license usually attend various museum studies courses offered in the universities today. In such courses, the student were to learn four major fields "Planning and Display", "Preservation and Storage", "Study and Research", and "Education and Popularization." But the guidelines for museum studies were revised in 2012. The change affected the university education program and the previously mentioned four divisions were even more finely differentiated, establishing new courses like theoretical studies on education, installation, documentation, media, management and others. Affected by this reform, the education and popularization activities at museums and art museums began to take varied styles.

The Idemitsu Museum of Arts has held various educational activities, bringing high school students (of art/calligraphy classes) to museums, providing classes/lectures at schools and holding research meetings for appreciation of calligraphic art works. Under the grant support of the Agencies for Cultural Affairs, the curator specialized in calligraphy conducted classes/lectures at school and worked together to build up the appreciation program. The lectures were made open to the greater public as research presentation classes.

In this paper, the author reports activities conducted this year related to this granted project and discusses further the current problems surrounding the education and popularization programs in the museums. The issues lurking between "Planning and Display" and "Education and Popularization" at the museum are discussed. In the perspective of the possible collaboration between schools and museums and for art education (appreciation education), the current situation in the high school art department (calligraphy) is examined for the first time. How to bridge the textbooks selected at school and activities of teachers who direct students to "Planning and Display" of the museums, and how to draw attention to and support an effective appreciation experience—these are mutual problems to be examined by both schools and museums.

The paper is the report of the collaborative project, with the supportive grant from the Agency for Cultural Affairs, between the exhibition "Styles and Forms of Calligraphy II—Succession and Originality of Beauty" held from November, 2017, at the Idemitsu Museum and the classes at high schools, and also explains the activities, points of attention and new knowledge obtained in the project.

出光美術館研究紀要 第二十三号

二〇一八年一月三十一日

編集 公益財団法人 出光美術館
発行 東京都千代田区丸の内三―一―一
電話 〇三―三二三―九四〇一

制作 株式会社 ブリュッケ

印刷 東洋美術印刷株式会社

© Idemitsu Museum of Arts, 2018
Printed in Japan